コラム

論と技の使い方　－理論に支えられた実践を－

2012．10 月

今年度も中間点に入った。これまでの実践から紡ぎ出された成果や課題をこれからの下半期でどのように処理していくかが重要となる。学校生活の大半の授業をどのように創るか，今一度考えたい。

3年算数「あまりのある割り算を考える」
指導主事示範授業 2012/09/26

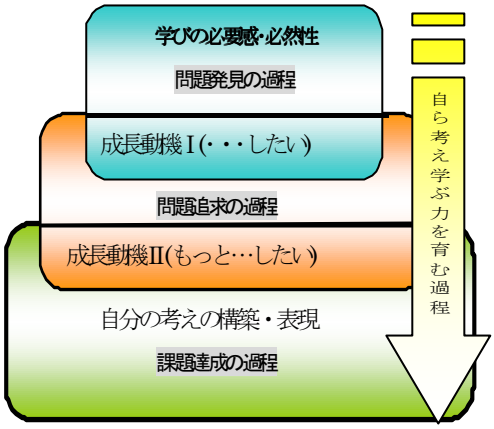
自分自身のことである。３０代半ばまで，研究授業と言えば，その日の授業を乗り切ることしか考えていなかった。本時の２～３時間前から考えることはあっても，本時をこなすためであったように思う。参考にするのは，まず教師用指導書と言われるもので，いい文章があれば探して，学習指導案を書き上げていた。

この考え方が根本から変わった研究授業がある。当時の校長から「この単元の２０時間の各時間の目標を言いなさい。」と言われ，答えられなかった。本時を何とかこなす考えに縛られており，大変恥ずかしい思いをした。その校長は，教師は，本時のみならず，その単元全体に責任をもつことを力説された。

もしこのような考えがあるなら改め，眼前の子どもに力を付けるために，単元構成を考え単元全体に責任をもってほしい。この単元構成には，やはり理論に支えられることが重要である。「理論なき実践は盲動である。」という言葉があるように，理論は必要である。しかし，「実践なき理論は空虚である。」という言葉もある。つまり，理論をもち実践を繰り返し，その実践から理論化していく作業が求められる。

理論なき実践は盲動である。実践なき理論は空虚である。

とかく授業方法が気になる。有名実践家の授業を追試したくなる。気持ちは分かるし，真似ることから本物を見出すことが多いから大切なことだと思う。注意したいことは，方法を真似るより考え方を真似ることを進める。そのひとつが，授業のユニバーサルデザイン研究である。今，最も勢いのある団体の一つ（日本教育新聞 24.9.3）の研究会であるが，授業をシンプル（焦点化），ビジュアル（視覚化），シェア（共有化）すれば，授業の UD 化が図られるという考え方が出てきていることを危惧している。また，本時だけを真似ても，悲しいかな単元全体が分からない。いい授業と言われる単元は，なぜか三次（つぐ）構成が多い。だからと言って，三次がよいとは限らないから要注意である。



単元全体の学びの連続・発展の構造

教師用指導書の前に学習指導要領解説書の熟読をお願いする。でも，その前に自己の子ども観や指導観，授業観などの観を再考する理論書が必要かもしれない。子どもの事実を中心に理論と教育技術を常に移動できるしなやかな実践家になりたいものである。